



| | |
|--------------|---|
| Title | 中井履軒・上田秋成合贊鶴図について |
| Author(s) | 飯倉, 洋一; 濱住, 真有 |
| Citation | 懐徳堂研究. 2012, 3, p. 3-15 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/24659 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中井履軒・上田秋成合贊鶴図について

飯倉 洋一
濱住 真有

一 履軒・秋成合贊鶴図の出現

平成二十二年十一月四日、ある古美術商から、履軒秋成合贊の鶴図一幅があるという連絡を受けた。所蔵者は、同年十一月三日に、大阪歴史博物館で催された懐徳堂資料展にちなむ湯浅邦弘教授の講演を聴講され、その幅を

大坂大学に寄贈したいという。履軒秋成合贊鶴図といえども、かつて雑誌『上方』第四十五号（「上田秋成号」昭和九年九月）十六頁に「森繁夫氏藏」として掲載され、その後、行方が分からなくなっているものが思い浮かぶ。『懐徳堂事典』（大阪大学出版会、平成十三年）にも、「中井履軒」に「鶴居」の項目をたて、「かつて上田秋成と中井履軒とが合贊した鶴図一幅があつた」と、鶴図に触れている。日をあらためて、古美術商が示した写

真を見せていただくと、はたして『上方』所載の写真と同じものである。平成二十三年二月二十五日、湯浅教授と飯倉とが、所蔵者の丸山保幸氏宅に出向いて原物を拝見、履軒・秋成とともに真蹟に間違いないだろうと鑑定し、懐徳堂記念会を窓口に寄贈を受け入れることが決まった。

履軒・秋成の合贊した画は他に知られておらず、両者の交遊が具体的に証されるモノは、本幅（図1）以外にはない。その意味で、本幅が、懐徳堂記念会百周年という記念すべき年に、七十七年ぶりに出現したことは、きわめて有意義である。同年四月二十一日には、大阪大学大学院文学研究科に、寄贈者の丸山保幸氏をお招きして、片山剛文学研究科長（懐徳堂記念会常務理事）より、感謝状が贈呈された。

後述するように、明治末ごろには、本幅を中井木菟麻

呂が模写している（図3）。もつとも、だからといってその時点で懐徳堂に存在したとは確言できない。少なくとも昭和九年の時点では前述のように森繁夫の所蔵であつた。昭和九年九月二十五日から二十九日に長堀高島屋で開催された上田秋成遺芳展覽会⁽²⁾で、「森繁夫氏」所蔵品として展観されたが、その展観札と思われるものが本幅とともに保管されている。その後、寄贈者の御尊父丸山保氏の手にわたつたようである。

保氏が平成元年に「入手あらましの記録」として、記憶をたどつて書いた覚書に、「昭和二十八年ごろ入手」とあり、入手先は「森繁夫遺族」となつてゐるという。森繁夫の没年は昭和二十五年であり、その後古書店か紹介者を通じて入手したものと推測される。昭和二十八年は、保氏四十六歳であった。なお保氏が森繁夫から譲り受けたものは他にもあつたといふ。本幅は、一時期大阪城天守閣博物館に貸し出された。保幸氏が天守閣博物館に問い合わせて下さつたところによれば、昭和三十一年四月から昭和三十二年八月までが貸し出し期間であつた。以上は保幸氏の御教示によるところである。

二 本幅の基本データ

- 作品名 中井履軒・上田秋成合贊鶴図
- 作者名 筆者不明。贊者のうち、題詩は中井履軒、和歌は上田秋成。
- 所蔵者 懐徳堂文庫
- 旧蔵者 森繁夫・丸山保・丸山保幸
- 員数 一幅
- 材質・技法 絹本着色
- 法量 本紙 縦三三・四×横四三・七センチメートル。
- 成立 中回し 縦五一・五×横五四・五センチメートル。
- 署名・印章 着賛は寛政末から享和頃か。制作時期はそれをお少し遡るか。
- 筆者の署名・印章なし。
- 履軒詩に、署名「履軒幽人題」（墨書き）、印
章「隱居放言」（白文方印）「天樂」（朱文長
方印）、秋成和歌に署名なし。印章「阮」「秋
成」（白文連印）。



図1 中井履軒・上田秋成合贊鶴図 懇德堂文庫所蔵



図2 中井履軒上田秋成合贊鶴図 懐徳堂文庫所蔵

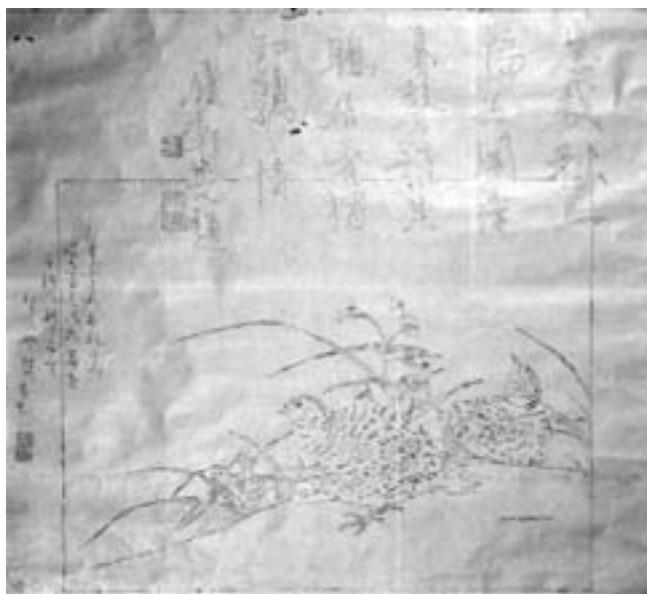


図3 中井木菟麻呂筆 中井履軒上田秋成合贊鶴図（模写） 懐徳堂文庫所蔵

○付属品その他

(中井木菟麻呂) 記

杉一重箱入り。中井木菟麻呂による箱書(墨
書、昭和八年四月)あり。蓋表に「画鶴一
幅 履軒秋成併題」(墨書)、蓋裏(墨書)
は左に記した。箱の中に、昭和九年長堀高
島屋にて開催された上田秋成遺芳展の展示
札あり。「履軒秋成合作鶴之図 森繁夫氏
藏(墨書)」のうち、「森繁夫氏藏」を棒線
で消し、「布施市 丸山保氏藏」を書き添
える。(布施市は昭和十二年四月一日から
昭和四十二年一月三十一日まで存在)

画鶴、筆者を番らかにせず。履軒幽人淡墨にて題詠
し、上田秋成国風にて之に和す。履軒楼台を起つる
の地なく、鶴居六遷、常処なし。隋處に書を著し、
五万余卷を留むるは、鶴の草間に卵を墜すが如し。
その誦するところの詩に曰く。「誰やしも 仮のや
どりに すまざらむ 仮の世に住む 仮の身なれ
ば」。展きて之に対へば、秋氣席に満つるを覚ゆ。
秋成亦た定居無し。鶴舎を称す。資性相似の二人、
併題して双璧を一幅に合す。宝重せざるべけんや。
昭和八年癸酉夏 水哉館後人天生記す。

中井木菟麻呂の箱書(蓋裏、墨書)は左の通り。句読
点を付し、後に書き下し文を添えた。

画鶴不審筆者。履軒幽人淡墨題詠、上田秋成國風和
之。履軒無地起樓台、鶴居六遷無常處。隨處著書留
五万余卷、如鶴之墜卵於草間。其所誦詩曰。「誰也
之毛 仮能耶登里爾 須滿瑳羅牟 仮廻世洱住武
仮乃身那礼波」。展而対之、覺秋氣滿席。秋成亦無
定居。稱鶴舍。資性相似二人、併題合双璧於一幅。
可不寶重哉。昭和八年癸酉孟夏 水哉館後人天生

「水哉館」は履軒のこと。「天生」は木菟麻呂で履軒の
曾孫。箱書中「履軒無地起樓台」は、履軒「天樂樓の記」
(『履軒弊帚』所収)に、「幽人蓋無地起樓台也、乃樓斯
樓也」とあるのを踏まえている。天樂樓は履軒が借りて
いた借屋の二階の一室で、そこを天樂樓と称した。また
いつも口ずさんでいたという和歌「誰やしも 仮のやど
りに すまざらむ 仮の世に住む 仮の身なれば」は、
ほぼ同内容の歌が、履軒の歌集『越吟』(大阪大学附属
図書館懐徳堂文庫所蔵)第三に二首ある。いずれも詞書

とともに引いておこう。

秋の田のかれいほなればうき」とはおはすらんと
人のいひければ

誰やしも仮のやどりにすまざらん仮や世にすむ仮の身
なれば

家なくてかたつむりをかりてすめることよと笑ふ

人ありければ

誰やしもからぬ栖のあらばこそ仮の世にすむ仮の身な
れば

三 履軒の詩について

悲哉秋一幅 悲しきかな秋一幅

若聞薄暮声 薄暮の声を聞くがごとし
誰其鶴居者 誰か其れ鶴居する者
独知鶴之情 独り鶴の情を知らんや

履軒幽人題

〔隠居放言〕〔天楽〕

「もの悲しいなあ、秋にふさわしい一幅の画を見ると、
薄暮に鶴の鳴く声が聞こえるようだ。どうして鶴居（の

よう）に野住・不常住（する）ものだけが、鶴の情を知つて
いるだろうか（誰でもこの画を見ると、鶴の情がわかるとい
うだろう）」の意である。⁽³⁾この鶴画の醸し出す悲しみの情は、
鶴居すなわち不常住の経験のないものにもわかるとい
うことで、画を贊しているわけである。履軒は「古風の詩
賦を喜びて誦し」（『履軒古風』自序）た人であり、本詩
も平仄の制約から自由である。

「鶴居」は、『莊子』外篇天地篇十二の「夫聖人鶴居而
穀食、鳥行而無彰」（夫の聖人は鶴居して穀食し、鳥行
して彰ること無し）を典拠とする。岩波文庫『莊子』
第二冊の金谷治訳を挙げれば、「かの聖人は鶴のよう
に居處を定めず、雛鳥のよう与えられるままに食べ、鳥
のよう自由に飛び回って、その足跡を残しません」と
いう意味である。『經典釈文』に「鶴居」を釈して「如
鶴之居、猶言野處、謂無常居也」といい、野住・無常居
の象徴とされている。

しかし、『莊子』の「鶴居」には秋のもの悲しさは見
られない。むしろ、履軒詩には、藤原俊成の「夕されば
野辺の秋風身にしみて鶴鳴くなり深草の里」（『千載和歌
集』・『無名抄』など）という有名な歌に代表される、秋
のわびしさとともにある鶴のイメージがある。

この詩は、履軒の詩集『履軒古風』に収められている。

書名のよう¹に履軒は懷德堂文庫所蔵の履軒自筆本には、

のである。

古事記傳説集

全くない。また、本詩集は、ほぼ年代順に並べられていて、この詩は、「癸丑」（寛政五年）と、「丁卯」（文化四年）の間に位置するから、詩の成立および画贊の成立もおおむねその時期と定めて置いてよいだろう。

秋成の歌について

むすぶよりあれのみ
まさるくさの庵を
うつらのとこと
なしやはてなむ（「阮」「秋成」）

印影の「附言」)。このうち「隱居放言」印は木菟麻呂所
有の竹山・履軒らの印章を懷德堂記念会が借りて作成し
た印譜『懷德堂印存』(懷德堂記念会、明治四十四年)
に載せるものと同じである。しかし「天楽」印について
は、履軒は後にこの印を失つたらしく『懷德堂印存』に
は、これを載せていない(別の「天楽」印は載せる)。
だが履軒の印であることは、『懷德』七九号(平成二十
三年一月)に寺門日出男氏「中井竹山・履軒の賛作書画

「（こ）に住みかとして構えて以来、荒れ放題のこの草の中の庵を、最後には鶴の住みかとしてしまうことだらうか」の意。筆跡は寛政末から享和にかけてのものと見られる。印章の「阮」「秋成」は白文連印（墨印）。同じ連印が実践女子大学附属図書館山岸文庫所蔵『不留佐登』や、大阪府立中之島図書館所蔵『秋成自筆草稿』（『藤簾冊子』「秋芽」の異文）に捺されている。

浅野三平『増訂秋成全歌集とその研究』（おうふう、平成十九年）を検すると、該歌は『藤簾冊子』『鶴の屋』『麻知文』に載るものである。

について」により印影が紹介された。履軒自筆稿本【雕題】の蔵書印「天樂」の印影と同じであることから疑いがない。ちなみに『環湖帖』(大阪府立中之島図書館所蔵)に捺された「天樂」印も同じ印章である。同帖を実際に見ると、やはり「隱居放言」印と共に捺されている。なお「天樂」は先述の履軒の書斎名「天樂樓」にちなんだもの

まりに、「むかしの長柄の浜松陰に、もとよりのしるべして、あやしの小家に移」つて来た。一度は草を刈り払つたが、深い雨の中でいつしかもとの草原になつたというので、愚痴がつい出てしまい、「むすぶよりあれのみまさる草の庵を居ず鶴の床となしやはてなん」と口づさみ、

まことや、鶴といふ鳥は、常のすみかをさだむる事なし。露けきあら野、或は垣ねの葉がくれも、しばしがほど身をやすからしむるとや。歛かきたり、やつか髭霜おけるにも、猶住つかん所だにさだめず、をちこちしありくあさましさを、かれにだもあえなばやはのしたなげきして、いほりの名を鶴の屋と呼事となりぬ。

と述懐した。また秋成の歌文集『藤簾冊子』卷二には、常居しない己のありようを歌う一連がある。

すみかさだめず、をちこちしあるくを、今はいびことにと、人のとひければ、風の上に立まふ雲のゆくへなくあすのありかは翌ぞ定めん

『麻知文』では、この地にしばらく住んだものの、「くせち」（口舌＝言い争い）が発生して住みにくくなつたとして、該歌が詠まれたことになつてゐる。

ちなみに『藤簾冊子』卷六には「鶴居」と題された二つの文章がある。最初の文章が、淡路庄での生活を描いとこたへしかば、爪はじきして、憎きものにいふ

となん聞こえし。

又長柄の浜松陰に、かりほつくりてすむとて、むすぶより荒れのみまさる草の庵を鶴の床となしやはてなむ

庵を鶴居と名付しは、聖人鶴居穀食食の謂にあらず、鶴は常居無しと云によれるなり。此いほりに、ある夜ぬす人入て、いさゝかある物をかづきもていにけり。あしたおもふ。
我よりもまづしき人の世にもあればうばらからたちひまくぐる也

「鶴の床」は和歌では常用され、「荒れる」イメージがある。藤原家隆の私家集『壬三集』冬に「すみ絶えぬ鶴の床も荒れにけりかれのとなれる深草の里」、『六百番歌合』『鶴』の藤原定家の歌に、「月ぞすむ里はまことに荒れにけり鶴の床をはらふ秋風」など。秋成の和歌はその伝統を踏まえたものである。

『麻知文』では、この地にしばらく住んだものの、「くせち」（口舌＝言い争い）が発生して住みにくくなつたとして、該歌が詠まれたことになつてゐる。

ちなみに『藤簾冊子』卷六には「鶴居」と題された二つの文章がある。最初の文章が、淡路庄での生活を描い

たものである。

五 秋成と履軒

秋成と履軒の交遊を具体的に示すモノは、本幅のみであるが、秋成が晩年の隨筆『胆大小心録』では、兄の竹山とともに履軒について述べた箇所がいくつかある。特に有名なのが、二六段で、

段々世がかわつて、五井先生といふがよい儒者じやあつて、今の竹山、履軒は、このしたての禿じや。(中略) 竹山は山こかしと人がいふ。山はこけねど、こかしたがつた人じや。履軒は兄とちがふて、大器のやうにいふが、これもこしらへ物じや。老が幽靈ばなしをしたら、跡で、そなたはさつても文盲なわろじや、ゆう靈の狐つきじやのと云事はない事じや、狐つきといふは、皆かん症やみじや、と大に恥しみられた。(中略) 学校のおとろへ、この兄弟で徳がつきたかしらぬ。

などとこき下ろしている。親しい友人に對して悪口を言うのは『胆大小心録』の特徴で、この文章もその例に洩れる。

れない。他に、二九段・五一段でも履軒に触れるが悪口に変わりない。

他方履軒が秋成について直接言及した文章は知られていない。しかし、先述した履軒の歌集『越吟』(履軒自筆、懐德堂文庫所蔵)に、次の歌がある。

うづらの屋何某におくれりける歌
かりにだにゆきても見まし鶴野や鶴と鳴て待人もが

な

この歌は『伊勢物語』一二三段を踏まえている。深草に住む女に飽いて、「年を経て住みこし里を出でいなばい」とど深草野とやなりなん」と女に贈った男の歌に対する返歌として、「野とならば鶴となりて鳴きをらんかりにだにやは君は来ざらむ」と詠む。『古今和歌集』雜下(読人しらず)では、「野とならばうづらとなきて年は経むかりにだにやは君は来ざらむ」とあり、「鶴と鳴きて」が履軒歌と同じ。「うづらの屋何某」を鶴と化して男を待つ女に見立てて、会いに行きましようという挨拶であろう。「うづらの屋何某」が秋成であると確言できないが、可能性はある。

六 鶴図について

季節は秋。横長の画面に二羽の鶴が、ツユクサと取り合わされて描かれている。画面に向かって左の鶴は、左方を向いて佇んでおり、右後方の鶴は上方を見上げている。手前の鶴の佇む土坡は、刷毛のようなものを用いて薄い墨で塗り込められている。ツユクサの花には群青、茎や葉には濃淡二種の緑（濃い緑は葉の表）、茎の節の部分に赤、鶴の毛には代赭、毛の先端やツユクサのおしへに胡粉、鶴の足と目、ツユクサの葉の一部（枯れた葉の表現）および花のおしへの先端には橙という彩色が見られる。本図には、作者を示す署名・印章は認められない。

本幅では、興味深いことに、中回しと本紙を跨がつて、中井履軒が絵の枠外から、上田秋成が絵の枠外へと着贊をしている。本紙部分には二者が（とりわけ着贊の文字がいつも大ぶりな履軒が）贊を寄せるための余白が十分に残されているとはいえず、本図は、着贊を想定して描かれた絵ではなく、着贊は、既存の表装済みの鶴図に対して、履軒、秋成の順に、即興的に行われたものと考えられる。^④二羽の鶴のうち、向かつて右の一羽は上方の履軒の贊を見上げ、手前のもう一羽は、左の秋成の贊の方

を向いているように見えるが、もともと描かれていた二羽の鶴の向きに従うかたちで二者の着贊位置が決められたものと推察される。

さて、本図の構図や形、描法や着色の方法に近似する先行作例を求めていくと、江戸時代前期に活躍した絵師で、室町時代に途絶えていた宮廷絵所預の職に就いて土佐派を再興し、江戸時代の土佐派の礎を築いた土佐光起（元和三—元禄四）の鶴図、たとえば「秋草鶴図」（静岡県立美術館所蔵）（図4）、「秋圃双鶴図」（『日本画大成』第二卷 大和絵（二）所載第一〇三図）（図5）などに行き当たる。光起は、中国宋代の画院画家・李安忠筆との伝承がある鶴図（今日、例えば根津美術館所蔵本などが知られる^⑤）を受容し、配置や取り合わせる植物などにアレンジを加えながら、数多くの鶴図を手がけていることが知られている^⑥。本図は、光起画の鶴図を繼承するものといえようが、光起画の毛描きなどに見られる纖細で綿密な描写と彩色が見受けられるものではなく、制作時期は、履軒、秋成の着贊がなされた同時期まで下る可能性も十分に考えられる。

なお、懐徳堂文庫が所蔵する資料（第二次新田文庫）に、中井木菟麻呂（天生、黄裳はその号）による本幅の摸写（まくり）（図3）がある。「鶴の里 黄裳模写双鈞」（墨書）



図4 土佐光起筆 秋草鶴図 静岡県立美術館所蔵



図5 土佐光起筆 秋圓雙鶴図 (『日本画大成』第2巻 大和絵<2>所載第103図)

という題紙一枚を伴うもので、明治四十四年一〇月六日刊行の新聞紙を筒状に丸めて薄葉紙で包んだものを芯としてこれに巻いて保存されている。⁽⁸⁾ 実線で囲まれた本紙部分の法量は、縦三三・五×横四三・〇センチメートル。

本図とほぼ法量が合致するものであり、絵と文字の輪郭のみを写し取る「双鈎」というやり方で、敷き写しがなされたものである。⁽⁹⁾ これは、おそらくは、木菟麻呂が、昭和八年に本図の箱書（蓋裏）を記すよりも以前に（明治末頃か）、本幅を実見して模写を行つていたことを示しているものと考えられる。

以上、署名・印章がない本図の作者を具体的に比定することは困難であり、これについては土佐派系統の絵師、着贊者の中井履軒、あるいは専門の画家ではない絵の嗜みのある人物によつて描かれた可能性なども含めて考えてみる必要があるのかもしれない。⁽¹⁰⁾ 本幅は、履軒と秋成の二者の交遊を示す資料として、また二者が同席して鶴図に着贊した時の即興的な雰囲気を今に伝える作例として、極めて重要であるといえる。

注

(1) 明治十五年岡山県生まれ。号小竹園（ささぞの）。昭和二十一年没。摺陽汽船・大阪商船等海運業の要職に就き、国文学

関係文献の蒐集家、国学者歌人の伝記研究者として著名。その蔵書は現在大阪市立大学に収められている。

(2)

（株式会社高島屋本社刊、昭和三十五年十月）により確認した。

『上方』四十五号（昭和九年九月）には、その告知が一頁を割いてなされている。『高島屋美術部五十年史』についても

大阪大学橋爪節也教授のご教示を得た。

(3)

解釈については大阪大学浅見洋二教授のご教示を得た。

(4)

大阪大学奥平俊六教授のご教示による。

(5)

土佐光起と鶴図に関しては、以下の論考に詳しい。実方葉子

「土佐光起の鶴」『茶道雑誌』第六十卷第十一号（平成八年）

一〇九—一一六頁。竹内美砂子「秋草鶴図屏風小考」「名古屋市博物館研究紀要」第十二卷（昭和六十三年）一一一頁。

藤島幸彦「土佐光起の鶴図—東博本『秋郊鳴鶴図』『野菊鶴図』を中心として—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第九集 創立百周年記念号（昭和五十八年）三〇五—三一五頁。

(6)

根津美術館所蔵本は、足利第六代將軍義教の鑑藏印と考えられる「雜華室印」を伴い、室町時代に日本に伝来したと考えられるもの。宮崎法子「花鳥・山水画を読み解く—中国絵画の意味」（角川書店、平成十五年）二二九—二三〇頁では、中国で鶴の図は安らかさの象徴であり（中国で鶴の意である

鶴と安が同音〈an〉、宋代に多くの鶴図が作られていること

昭和七年）第一〇二二回

からも大変人気のある画題であつたことが指摘されている。

前掲注5実方論文では、光起の鶴図に、中世以来の和歌にお

ける鶴のイメージ、例えば「人知れずひそかに暮らす鶴の姿」などが投影されていることを指摘する。

(7) 前掲注5藤島氏論文では、調査で実見したものと各種写真資料の収集によつて氏が確認した光起筆とされる鶴図は一〇九

点に及ぶといふ。

(8) 懐徳堂文庫の所蔵作品のうち、木菟麻呂による模写も現存する。例に、岩崎象外筆・中井履軒賛「解師伐猿図」がある。

(9) 双鈞については、奥平俊六編『懐徳堂ゆかりの絵画(阪大リーブル)』(大阪大学出版会、平成二十四年三月刊行予定)を参考のこと。

(10) 懐徳堂文庫所蔵の履軒作品に、「左九羅帖」「墨竹図」(五井蘭洲筆)模写がある。

〔図版出典〕

口絵及び図1—3 濱住が撮影した。

なお、口絵3及び図3の撮影では大阪大学藤岡穰教授の協力を得た。

図4 静岡県立美術館より写真原板の提供を受けた。

図5 『日本画大成』第二卷 大和絵〈二〉(東方書院、

【補記】

本稿は第五節までを飯倉が、第六節を濱住が主として執筆し、意見交換した上で全体の体裁を整えた。

また、本稿を成すにあたりお世話になつた丸山保幸氏・懐徳堂記念会・大阪大学附属図書館・大阪大学大学院文学研究科貴重書室に深謝申し上げる。

なお、本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(B)「近世上方文壇における人的交流の研究」(研究代表者・飯倉)の研究成果の一部である。